

## ◎ 美術館情報

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの美術館等で、臨時休館やイベントの休止、展覧会の中止や開催期間の変更、および入館方法等が変更になっています。

状況が日々変動しているため、各施設の公式ホームページなどで最新の情報をご確認ください。

### 1. 大阪日本民芸館【大阪・吹田】(<https://www.mingeikan-osaka.or.jp/exhibition/special/>)

3月5日(土)～7月18日(月・祝)

春季特別展：大阪日本民芸館 50周年記念「今のかたちー西日本の民藝ー」

1972年に「民藝運動の西の拠点」として開館した大阪日本民芸館は、今年で50年の節目を迎えます。本展ではこれを記念して、関西から沖縄までの西日本で活躍する現役の作り手、約100名の作品を一堂にご覧いただきます。柳宗悦らが創始した民藝運動は、彼らが見出した美の紹介を主軸に、手仕事の復権や各地の民芸館を拠点とした普及活動など多彩な広がりを見せました。その活動の一つとして早くから目指されていたのが、時代に即した新作を生み出しそれらを生活に結ぶことでした。こうした民藝運動には草創期から多くの作り手が参加し、担い手として活躍する一方で、彼らもまたその美意識を自らの制作に生かしてきました。そして現在でも、様々な立場、世代、あるいは地域性や制作の分野といった異なる状況の中で、それぞれに民藝と向き合いながら優れた品物を生み出しています。民藝という言葉のもとに集った現代の作り手達による「今のかたち」、その多様性や魅力を200点以上の作品を通してご紹介します。コロナ時代の今だからこそ、西日本各地の作り手のもとへ旅をするように、現代の手仕事の数々をお楽しみください。



### 2. 三井記念美術館【東京・中央区】(<https://www.mitsui-museum.jp/exhibition/index2.html>)

4月29日(金・祝)～6月26日(日)

特別展：絵のある陶磁器 ～仁清・乾山・永樂と東洋陶磁～

江戸時代の京都では、仁清や乾山の色絵陶器、染付や金襷手のような中国陶磁を写した永樂家の陶磁器など、絵のある陶磁器が多く焼かれ、それが今日の京焼へとつながっています。「江戸店持(えどだなも)ち京商人(きょうあきんど)として、京都に居住した豪商三井家は、茶の湯を通じて仁清や乾山につながる永樂家の陶磁器を好み、長年にわたり親交がありました。



今回の展覧会は館蔵品のなかから、仁清・乾山をはじめ、写しの世界ともいえる永樂保全・和全の陶磁器を中心に、そのもとになった中国陶磁もあわせて展観します。館蔵品としておなじみの陶磁器も多いかと思いますが、今回描かれている絵や文様世界に注目しながらお楽しみください。

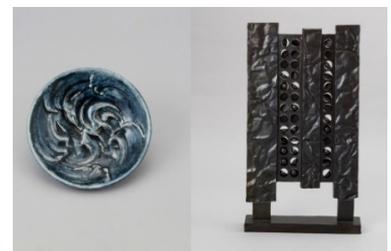
### 3. 兵庫陶芸美術館【兵庫・丹波篠山】(<https://www.mcart.jp/exhibition/#jikai>)

6月11日(土)～8月28日(日)

特別展：受贈記念 平井昭夫コレクション×三浦徹コレクション

やきものを愉しむー二人のまなざしー

神戸市在住の平井昭夫氏と三浦徹氏から現代陶芸を中心とする作品を受贈しました。平井氏は陶芸家・河井寛次郎(1890～1966)の作品に感銘を受け、また三浦氏は丹波焼と出会い自ら作陶するまでに魅せられました。それぞれの思いで親しみ続けたやきものを一堂に紹介します。



#### 4. 多治見市美濃焼ミュージアム(1)【岐阜・多治見】([https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki\\_museum/](https://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum/))



4月23日(土)~8月28日(日)

企画展:「未来につながる水月窯 ~伝承と技を越えて~」

水月窯は、人間国宝 荒川豊蔵が、昭和21年(1946)に多治見市虎溪山町に開いた窯です。そして現在に至るまで、豊蔵とその子や孫が中心となり、全工程を手作業で行う窯業生産を今日まで、脈々と続けてきました。そんな水月窯の器には、どんな生活シーンにも寄り添うやさしさがあります。実際に湯呑を使ってみると、大きすぎず小さすぎず、手のひらに収めるのにちょうどいい大きさです。そして、きめ細やかな地肌で、なんとも言えないなめらかな手触りと、シンプルで飽きのこないデザインとなっています。作者の誠実さが伝わってきます。こんな、どこか不思議な魅力を感じさせる手仕事のよさが、ここにはあります。スピードと効率が重視され、これが日常の常識となっている現代にあつて、愚直なまでに人の手わざにこだわりきる水月窯。本展では、こうし

た水月窯の製作の過程をひもときながら、受け継がれていくもの、そして未来に向かう水月窯の魅力をご覧ください。

また、「水月窯」開窯75周年 記念事業として『私の汲出(くみだし)茶碗 ~水月窯で絵付け体験~』を行います。豊蔵がデザインし、水月窯の定番商品となっている汲出茶碗。そこにあなただけの絵付けをしてみませんか。水月窯で職人の技を学び、実際に作業をしてもらいます。絵付けをした作品は焼成し、お渡します。

#### 5. 多治見市美濃焼ミュージアム(2)【岐阜・多治見】

4月23日(土)~12月25日(日) ※会期中、一部展示替えを行います。

企画展:「明治・西浦焼の世界」

日本の陶磁器の技術や意匠の改革が推し進められた明治時代に焦点を当て、同時代の美濃を代表するブランドである「西浦焼」の世界と、国内外の作品をあわせて展覧します。

明治政府は殖産興業を推進し、万国博覧会に美術品を出品することを奨励していました。こうした万国博覧会の会場で日本の技術者は、アメリカのルックウッド社の製品など、当時世界をリードしていた、それまでの日本にはなかった美しいやきものを目の当たりにします。

西浦圓治(にしうらえんじ)もその中の一人です。「西浦焼」とは土岐郡多治見町(現多治見市)を中心に、明治初期より三代から五代西浦圓治のもとで製造されたやきものことをいいます。なかでも五代西浦圓治が明治30年代から44年にかけて製作した、釉下彩と呼ばれる作品が広く知られています。釉下彩(ゆうかさい)とは、透明釉の下に多彩な色によって絵や文様を施す技法です。釉薬の下で発色するため上絵具などのはっきりとした色合いに比べて柔らかな雰囲気が特徴です。さらに図柄・形状についても、明治後

期にヨーロッパで流行したアール・ヌーヴォー様式を採り入れているものが多く、世界的に見ても時代の先端をいく陶磁器でした。「西浦焼」という一つのブランドとして、多くは欧米向けの輸出品として販売されました。本展では「加納コレクション」を中心に「西浦焼」の歴史を紐解きながら、明治時代に各国で開催された万国博覧会を舞台に花開いた、優美な作品をご紹介します。

